

聴覚障害学生のバレーボール指導について 3

－世界ろうあ者競技大会（デンマーク）に参加して－

聴覚部 建築工学科 今井 計

要旨：平成3年から本学に着任し、テクノレポート第3号では、平成7年度の本学バレーボール部の活動について報告した。現在指導7年目を迎えている。97年7月13～26日にデンマーク（コペンハーゲン）で開催された第18回世界ろうあ者競技大会の日本選手団役員として派遣させていただいた。そこで世界のろうバレーを見、現在の日本ろうバレーの現状と今後の課題が自分なりにわかった気がする。そこで今大会の男子バレーボール競技を通じて、今後の日本ろうバレーの方向と本学のバレー部の果たす役割を報告する。

キーワード：聴覚障害学生、バレーボール指導、世界ろうあ者競技大会、日本ろうバレー

1. 世界ろうあ者競技大会について

1.1 概略 目的は「国際的親善・友愛の精神を養うとともに、スポーツの発展と向上に寄与するために、4年に1回各国で持ち回りで開催する」とされている。主催は国際ろう者スポーツ委員会（略称：CISS）である。今大会の参加国は58カ国であった。

1.2 競技種目 個人競技：陸上・バトミントン・ボウリング・自転車・テニス・オリエンテーリング・卓球・射撃・水泳・レスリングで、団体競技：バレーボール・バスケットボール・サッカー・ハンドボールである。

1.3 日本代表選手参加種目 個人競技：陸上・バトミントン・テニス・卓球・水泳で、団体競技：バレーボール（男女）選手44名（男子23名、女子21名）役員13名の合計57名である。

1.4 国内の現状 国内のろうあ者大会での参加種目をあげてみると、97年9月の香川県での全国大会では、野球（軟式）・卓球・陸上・バレーボール・柔道・サッカー・テニス・ゲートボール・ボウリング・バトミントン・ソフトボールが行われた。世界ろうあ者競技大会（以後世界大会と略す）では、国内で行われていない種目もあり、まだまだ聴覚障害者のスポーツの幅を広げられる可能性があると感じた。しかし、国内での聴覚障害者（スポーツ）に対する指導者がいないというのが課題である。これは既存の競技種目にも言えることであり、ろう者・聴者の指導者がともに不足している。

2. 日本男子代表チームの選考

2.1 アジアろうあ者競技大会 96年3月末から4月初旬にかけて、マレーシア（クアラルンプール）でアジア

ろうあ者競技大会（以後アジア大会と略す）に参加のために、95年9月に行われた全国大会（茨城県）で12名が選考された。この時点で出場国は、イラン・インド・インドネシア・日本の4カ国でアジア代表枠の3つを争うことになっていた。しかし、インドネシアの棄権ということで、自動的に3カ国が決まり、バレーボール競技については行われなかった。

2.2 国内合宿について 96年5月に、第1次合宿を東京で行った。96年9月全国大会（大分県）で新たに4名が選出され、96年11月の全国身体障害者スポーツ大会（以後身障者国体と略す）終了後に、第2次合宿を広島で行い、最終メンバーが決まった。その年の年末年始に沖縄で、97年5月に広島で、同年6月に鳥取で合宿を行った。内容は3人サーブプレシーブ制でコンビバレーをする戦術を使い、地元社会人・学生チームとの練習試合の中で、サーブプレシーブの返球率を上げることが課題だった。前回の世界大会（ブルガリア）の時よりは合宿の回数は増えた。男子代表チームのレベルは、高校生の全国レベルよりも落ちるといのが実状だ。

3. 世界大会に望むにあたって

3.1 情報収集 前回の世界大会の成績（1位イタリア、2位アメリカ、3位ブルガリア、4位ポーランド、5位ロシア、6位フィンランド、7位オランダ、8位イラン、9位ドイツ、10位日本、11位インド、12位ベルギー）を調べて、強豪のヨーロッパチームの情報を入手することにした。ヨーロッパ選手権が開催されており、その結果を知ることができた。1位イタリア、2位ドイツ、3位フィンランド、4位ウクライナ、5位ポーランド、6位

ロシア、7位オランダ、8位ベラルーシだった。また、世界大会の情報はインターネットを通じて知ることができた。

3.2 組合せ決定 男子はグループBでイタリア・ドイツ・フィンランドに決まり、ヨーロッパ選手権のベスト3と当たることになった。イタリアは前回優勝チーム、フィンランドには今まで1度も勝ったことがなく、ドイツには前回初めて負けたということで、とにかく初戦のドイツに照準を合わせるようになった。その勢いでフィンランドと戦い、たとえイタリアに負けたとしてもB組2位の通過を考えていた。決勝トーナメントにいけば、ウクライナとの対戦の可能性が高く、厳しい戦いが予想された。

4. 予選リーグ

4.1結果 第1戦ドイツ0-3(12-15.9-15.6-15)、第2戦フィンランド3-0 (15-7.15-9.15-2)、第3戦イタリア0-3 (12-15.11-15.16-17)の1勝2敗の3位で9～16位決定戦にまわった。

4.2ドイツ戦 0-2となった段階で、監督が3セット目のスタートからレギュラー4人をベンチに下げるといふ采配を振るい、チーム内に不信感を持たせた。初戦というのはチームにとっても勢いをつけるための大切な試合であり、大会でのチームの戦い方に非常に左右するもので、チームにとっては出鼻をくじかれた感じがあった。3セット目もレギュラーメンバーで戦い、大差をつけられる試合運びならば、ムードを変えるためにベンチのメンバーを出すのがベストと考えていた。これならレギュラーメンバーも交代させられても納得できるはずである。今回も監督は男女兼任ということなので、第2戦以降は女子との試合時間も重なることもあり、女子の監督に専念してもらった。私が監督代行を務めた。

4.2フィンランド戦 初戦を落としたという気持ちとフィンランドには勝ったことが無いという気持ちと全敗では帰れないという気持ちが交錯して、試合前からずいぶん硬かったように思えたが、試合が始まると相手のミスに助けられ、終始こちらのペースだった。試合中はとにかくリラックスすることしか指示は出さなかった。勝利が決まり、なんとか立ち直ったようだった。

4.3イタリア戦 イタリアとの試合は、今までの練習の成果を最大限出すことができた。各セットともサイドアウトの繰り返しで10点くらいまでは互角それ以上の戦いが出来ていた。最後の詰めの段階で自力の差が出た形となった。客席からも熱い声援が送られ、予選リーグで一番の盛り上がりを見せてくれた。結果的には0-3だが、試合時間は2時間近くかかった。それだけサイドアウト

が多かったということにもなる。彼らがやろうとしているバレーが間違っていなかった試合でもあった。前回優勝のイタリアを予選の段階から苦しめた日本チームの評価が高くなった。しかし、このあとにもっとすごいことが起こるとは誰も予想していなかった。

5. 順位決定戦

5.1結果 9～16位決定戦の第1戦D組3位インド3-0(15-3.15-4.15-7)、9.10位決定戦でロシア3-1(13-15.15-3.15-8.15-6)に勝ち、最終順位は9位となった。(前回は10位)

5.2インド戦 実力的にも差があり、2セット目からはベンチのメンバーを先発させ、勝利をおさめることが出来た。

5.3ロシア戦 1セット目相手のライトへの速い平行トスに手を焼き、ブロックアウトばかり取られて先取されてしまった。2セット目のスタートでタイミングが合うようになり、あとは相手のミスにも助けられて、その後の3セットを連取できた。

5.4試合を通じて ヨーロッパの強豪と試合ができて、メンバーもいい勉強になったと思う。ここまでできるのだったら、本当にドイツ戦の敗戦が悔やんでも悔やみきれない。いかに初戦がチームにとって大切であるかを身にしみてわかったと思う。監督代行として敗戦のショックもありながらも最後まで戦ってくれたメンバーには感謝している。今回の教訓を是非4年後のイタリアの世界大会に活かして欲しい。

6. 決勝トーナメント

6.1ベスト8 アメリカ・ポーランド・オランダ・イラン・ウクライナ・ドイツ・イタリア・カナダが残った。前回もベスト8に残っているのは、イタリア・アメリカ・ポーランド・オランダ・イランである。世界を考えた場合、やはりヨーロッパ中心になっている。これは聴者のバレーでも同じことが言える。高さやパワーが主流になっているのは、ろう者でも同じである。日本のろう者では考えられないような高さから打ち込まれるスパイクと覆い被さるようなブロック合戦を見ていると、今後の日本の方向は「速さと正確さ」となるだろう。

6.2台風の日 イランは練習会場が一緒に練習を見ることができて、内容も簡単でアップが終わるとネットを挟んで、3対3に分かれて延々と乱打を繰り返しているだけだった。公式練習をよく見ているとスパイクはしっかりコーナーを狙って打つし、レシーブも山なりではなく、直線的にセッターへ返球しているところを見ていると、相当練習とトレーニングを積んできているなという印象を持った。とにかく反応は速いし、跳躍力もあった。予

選ではアメリカには負けたもののロシアに勝ち、準々決勝でも高さのオランダを3-1で下し、準決勝へ進んだ。

6.3準決勝 イランがイタリアに勝った。これは聴者の世界でもなかったことで、すごい衝撃を受けた。それも2-0でイタリアが3セット目も14-10で誰もが「勝負あった」と思ったら、そこから大逆転でセットを取ったら、完全に形勢逆転でイランのペースとなり、イタリアが受け身になってしまい、そのまま3-2で押し切られてしまった。やはり試合は終わるまで何が起るかわからないと言うことを教えられた。

6.4イランの特徴 特別に何か戦術があるということではないが、とにかくよく拾うし、基本的に忠実でミスを出さないこと、攻撃はサイド中心ですべてブロックアウトを使い、相手ブロッカーがサイドに意識し始めるとクイックを使うものだった。この時点で日本がイタリアと熱戦を繰り広げたことは、吹っ飛んでしまった。イタリア戦でマッチポイント取りながら勝てなかった日本とマッチポイントを取られながらそれをひっくり返したイラン、ここに大きな差があると思う。

6.5決勝 イランはウクライナに0-3と破れはしたが、大健闘と言っていいだろう。同じアジアの代表として、ここまでやれることを証明したのだから、日本も出来ないことはないだろう。優勝したウクライナは準々決勝でドイツに1セット落としただけで、あとはすべてストレート勝ちだった。ここは強烈なジャンピングサーブが主体で、両エースが決定力があり、ブロックも強力だった。イランのスパイカーが準決勝まで通用していたブロックアウトをさせてもらえなかった。

6.6全試合を通じて 今回初めて世界大会に派遣していただき、ろう者のトップレベルのバレーを見ることが出来た。男子については前回は10位と振るわなかっただけに、今回は将来上位に入るきっかけを作る布石を作らなくてはならない大会で9位とは残念で仕方ない。でも実力的に言えば、8位のカナダ、7位のドイツあたりには十分勝てる布陣であった。ランク的に言えば5～8位と自負している。今回はベスト8に残り、今後の日本は怖いぞという印象を各チームに植え付けておく必要があった。

7. 大会を通じて

7.1 代表者会議 英語はもちろんのこと、国際手話とアメリカ手話が中心で会議が進められていた。進め方は、組織委員会のメンバーが説明したことを、まず国際手話と音声で英語に変えて、それを各国の通訳者が、音声と手話に変えていた。日本選手団役員には今回専属の音声通訳団はいないので、役員の負担もかなり大きかった。

やはり、今後も音声通訳団の派遣が難しいとなると、国際手話かアメリカ手話のできる役員の養成も必要になってくる。

7.2 監督 各国の監督を見て、一種のプロ監督のように思えた。自分の生活をかけて戦っているという雰囲気伝わってくる。それと試合以外では対戦相手の分析も監督自らメモを取ったり、選手個人のデータ表を作成したり、コンピューターを駆使するチームもあり、情報収集に関しても聴者のバレーに近づきつつある。おそらく、国のバレーボール協会から派遣されていると思う。そういう国はバレーボール協会の中にろうバレーボール協会が組織化されているのではないかと思う。イタリア・オランダ・ウクライナ・アメリカなどは、聴者のナショナルチームと同じデザインのユニフォームを着用しているのを見るとそう思えてならない。日本は監督についても組織にしても遅れをとっているのは間違いない。

7.3 ルール 今回は先に5点、10点を取ったらテクニカルタイムアウトを、セットに1回通常のチャージドタイムアウトの合計3回のタイムアウトがあった。国内の聴者の国際試合では行われているが、ろう者の大会では行われていない。監督は試合当日になって、自分が説明するまでわからないと言うのは困る。また、選手もそのことを把握できていなかった。

7.4 オフィシャル 主審と副審は国際審判員が担当していた。スコアは組織委員会のバレーボール担当がローテーションを組んでいた。一番驚いたのはラインズマンである。なんと対角線上に2人しかいないのである。これは日本国内の大会でもたとえレベルが低かろうと4人はいる。世界大会でこんなことがあっていいのだろうか。しかもおそよルールなど知らない地元の中学生あたりがボールボーイを兼ねながらラインの判定をするのである。大会規定には「ラインズマンは組織委員会が任命する2名」と書いてあるのには違う意味で驚いた。是非改善して欲しい。

7.5 ドーピング 自分自身聴者のオリンピックをイメージしていた。コペンハーゲンというところには国際オリンピック委員会のドーピング検査機関があること知り、出発前に入念にチェックした。大会が始まると病人やけが人が出ても、医師には「ドーピングにかからない処方せ」とお願いしていた。しかし、日本選手団でメダル獲得者が出ても、ドーピング検査は行われず、拍子抜けをしてしまった。ドーピング検査をやったという情報さえなかった。ただ、大会期間中に無作為で選ばれた選手の聴力検査はあった。日本選手団役員にドクターやトレーナーやアナリストの同行を希望する。たとえろう者でも日本代表である。彼らたちは選ばれた者でそれなり

の処遇を受けることが当然なはずである。他国は最低でもトレーナーはいた。

8. 日本チームの今後の課題

8.1 バレースタイル 目指す方向は間違っていないと思う。複雑なコンビバレーが出来るということではトップクラスと言える。これをいかに浸透させ、正確に出来るようになるかだと思う。同じ速いバレーでもイランとは違うタイプの日本ならではのものを作れるかである。世界を見ても、3人もしくは2人サーブプレシブ制を採用しているし、ジャンピングサーブも打つし、バックアタックも取り入れている。ろうのバレーも聴者と同じバレースタイルに変わりつつある。しかし、リードブロックをやっているチームはいなかった。

8.2 今回のセッター コンビバレーをやるためには、セッターが重要になってくるのは当然である。今回の代表チームのセッターは、幸いにも中学・高校と聴者の中でのバレー経験が豊富で、高校時代にはレギュラーセッターとして、春の高校バレーや夏のインターハイにも出場した経歴の持ち主である。今後このようなキャリアを持ったセッターは出てこない。バレーボール競技に関しては聾学校の全国大会は無いし、インテグレートの子生はほとんどスパイカーが多い。彼に続く若手のセッターが育っていないのが現状である。また、インテグレートのプレイヤーの発掘も必要である。

8.3 セッターの育成 今大会の12名のメンバーとして、たとえ試合には出られなくても、世界のバレーを見ておくことが次回への貴重な財産になるはずである。それが出来なかったことは今後大きく響いてくるだろう。若手のアタッカーは今回大活躍をしたので、その経験が活かされると思う。そうすると、4年後だけではなく、8年後も見据えたセッターの人選が必要となってくる。しかし、国内のろうあ者体育大会を見ている限りでは、上げているのが精一杯というセッターが多く、コンビバレーをやれるような有望な人は見当たらない。そうすると現在16~20才位の若手のセッターを発掘して、育てていかないとどんどん世界からは置いて行かれることになる。

8.4 5セットマッチ導入 世界大会は予選からすべて5セットマッチである。国内では3セットマッチであるため、5セットマッチの試合の流れや運び方を知らないのと、5セットを持ちこたえるだけの体力が無い。メンバーの中には1セットの終盤でスタミナ切れをする人がいた。これでは世界では戦えない。まずは国内の大会を5セットマッチに切り替える必要がある。(せめて準決勝からでも) その動きはあるようだ。

8.5 国内の様子 全国大会に出場するチームのほとんどが社会人中心で、週末や連休の練習のみである。そうすると時間も限られているため、ボール使う練習が中心になるのは当然である。よほど時間を取らない限りはトレーニングはできない。それに彼らは土日関係なく夜勤をする人も多く、全員そろっての練習もできないこともあるし、夜勤明けの練習では、肉体的にもつらいものがある。それぞれのチームがそういう厳しい環境の中でバレーボールをやり、選抜されて日本代表としての練習を各地から集まって、世界大会を目指すのだから、条件的にもかなりの負担になる。これから長期に渡って、強化をしていくなれば、彼らには今以上に練習に打ち込める環境作りと会社の理解が必要である。

8.6 当面の目標 今回は幸いにも男女とも各12名派遣してもらえたが、次回もそうなるとは限らない。他国のチームでもほとんどが12名は揃っていない。そういう環境の中で世界大会を目指しているのである。だからこそ今回は好成績をおさめなければいけなかったのである。2大会続けて男子はベスト8を逃し、女子はメダルを逃したことをスタッフも選手も厳粛に受け止めるべきである。男子に関しては当面は次回のアジア大会でイランと互角に戦えるだけのチームが作れるかが課題となるだろう。そうなれば、他国のチームに警戒してくるだろう。もし、中国や韓国が本気で強化に乗り出してきたら、アジアでも勝てず、世界大会にさえ出られなくなる日が来るかもしれない。

8.7 今後の動き 身障者国体は98年神奈川以降のバレーボール競技の実施の計画が出ていない。そうすると公式試合数の減少という問題も出てくる。そこで日本ろうあバレーボール協会の設立の動きがあるようだ。そこでランキング大会など実施して、よりいい選手を発掘・育成したいということらしい。

9. 本学の役割

9.1 メリット そこで本学ではどういうことができるのかというと、まずは学生であること、つまり時間は自由に使えること、練習やトレーニングに打ち込める環境が整っていること、これが一番のメリットである。本人の気持ち次第では、好きなだけバレーができるのである。しっかりとトレーニングを積んでいけば体はできあがると思う。あとは聴者との5セットマッチの公式試合ができることである。ご存じのように本学は関東大学バレーボール連盟に加盟しているので、大学生の試合に参加できるのである。これは他のチームには絶対に真似出来ないことであり、貴重な経験が出来る場でもある。審判・記録講習会にも参加が義務づけられているので、ルール

など理解できるようになるし、他校との交流もできる。茨城県内でも97年12月から新たに、筑波大学大学院生が中心となって、T-CUPという県内リーグ戦もスタートした。

9.2 デメリット 本学入学とともにバレーボールを始める学生が多く、3年間でやっとバレーがわかり始める頃に卒業と言うことで、もっと時間が欲しいというのが本音である。しかし、卒業生のほとんどは、バレーを続けてくれ、「在学中にもっとやっておくべきだった」と反省する人が多く、いかに本学が恵まれた環境下にある

かということが改めてわかる瞬間でもある。

9.3 今後 バレーボールも「教育」という観点から考え、スポーツでも本学がろう者の拠点となるような環境作りをしていきたい。現在の新チームは春季大学リーグに向けて練習をスタートさせている。現在新たにビジョントレーニングを開始し、今後科学的なトレーニングも始める方向で動いている。このような経験を是非卒業後も活かして欲しいと思う。

10. 最後に 図1～16は今大会の写真である。雰囲気はわかってもらえれば幸いである。



図1 出発前の結団式



図2 成田空港にて松平ご夫妻から激励

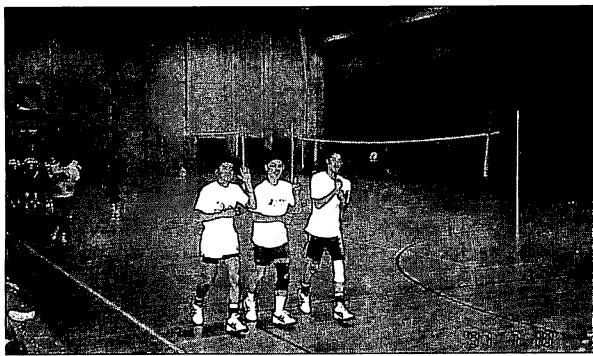


図3 試合会場での練習

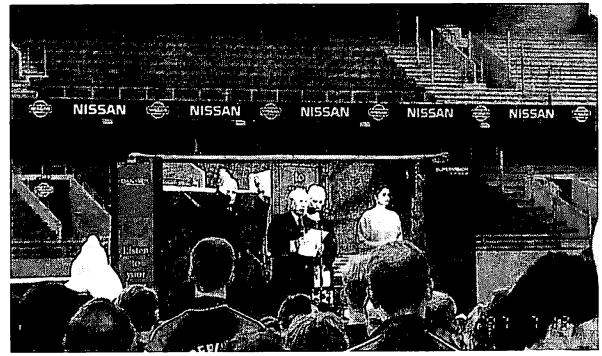


図4 開会式でサマランチ会長の挨拶



図5 開会式(本学の学生と)

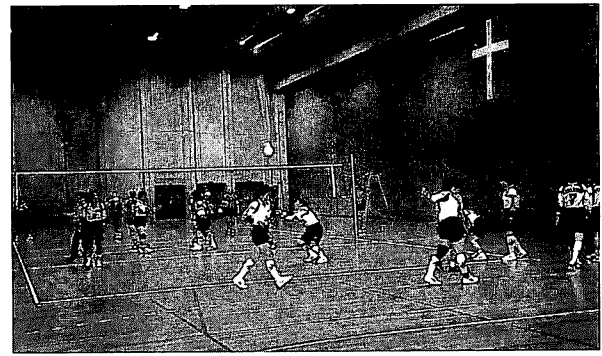


図6 公式練習の様子

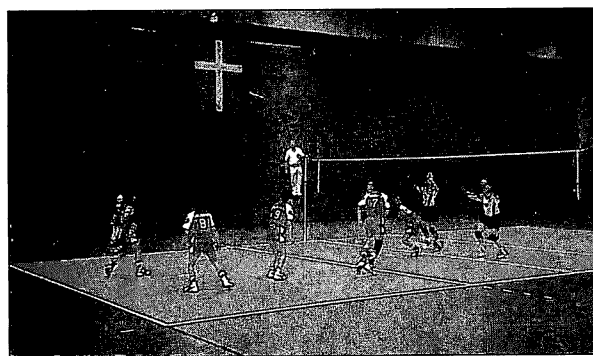


図7 試合の様子(ドイツ戦)

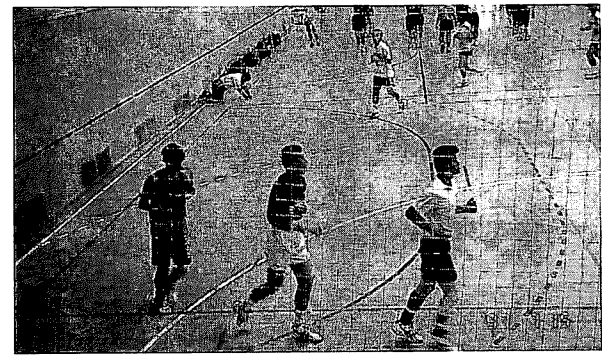


図8 試合の無い日の練習会場

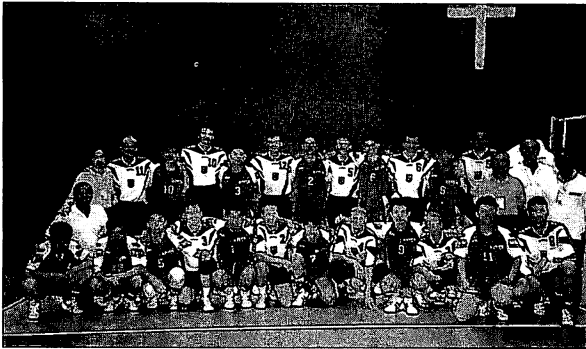


図9 ドイツのメンバーと



図10 フィンランドのメンバーと

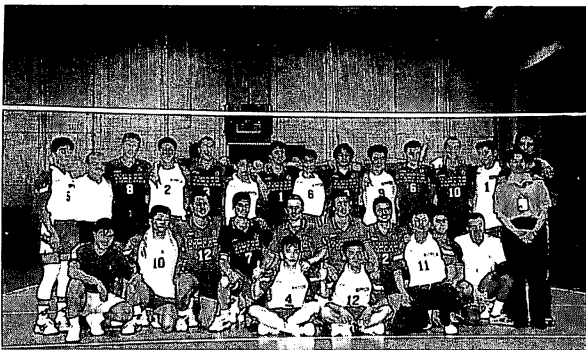


図11 イタリアのメンバーと



図12 ロシアのメンバーと

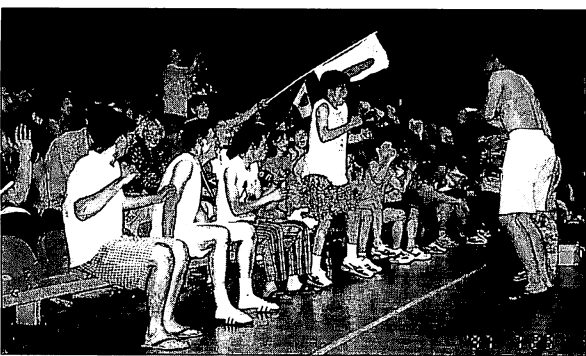


図13 観客席の様子



図14 応援してくれた現地の方々



図15 組織委員会の担当者(共にろう者)



図16 閉会式の様子

The Study of Volleyball Exercise for Deaf Students 3
-from 18th World Games for The Deaf (DENMARK)-

keywords :Deaf Students, Volleyball Exercise, World Games for The Deaf,
Japan Deaf Volleyball